

第2章 学習意欲を高める授業モデルの構築 — 言語活動の充実を図る視点から —

第1節 国語

1 基本的な考え方

(1) 国語科における学習意欲を高める指導の基本的な考え方

学校教育の中で、子どもたちを「場にふさわしい言葉の使い手」として育てていくための3つのステップがある。

- ① 言葉の感覚を磨くこと
- ② 言葉に関心をもつこと
- ③ 学校での学びや遊びが、生活や生きることにつながっていると実感すること

「言葉の感覚を磨くこと」と「言葉を磨くこと」は違う。別の言い方をすれば「よりよいコミュニケーションができるように感覚を磨くこと」である。具体的には、相手が話していることを正しく聞き取ったり、書かれていることを間違いなく読み取ったりすることや、自分の思いを相手にわかりやすく話したり書いたりすることである。コミュニケーションの力は、特別に意識することなく過ごしている日々の生活の中で育まれていくものであって、学校の授業ましてや国語の授業だけで磨いていけるようなものではない。児童が、学校生活のあらゆる場面で友達や教師と共によりよい学校生活を送ることができるように、しっかりコミュニケーションをとりながら豊かな感性を磨いていく日々の指導こそが、言葉の感覚を磨く指導そのものである。

「言葉に関心をもつこと」とは、「常に言葉を意識していること」である。例えば、いい本やいい文章に出会って感動したり、自分の気持ちを端的に表してくれた言葉に心が動かされたりする経験などがそれである。原稿を書いたり人前で話したりするときの表現について迷ったり、他人の言葉やことわざなどを引用したりするとき強く意識されるものである。

「学校での学びや遊びが、生活や生きることにつながっていると実感すること」というのは、具体的には、学びや遊びを通して知ったことや気付いたことを「友達や家族との会話で話す」ということである。「国語の授業で『いなばのしろうさぎ』のお話を聞いたよ。」「それは『矛盾』しているよ。」など、学んだことが日常生活の会話の中で生かされることによって、自らの言葉が磨かれていくことが実感できる。そしてその実感は、自らの人生が豊かになっていくという充実感とそのまま結びついているのである。

自らの言葉は、生涯にわたって磨き続けるものである。特に、小学校での6年間は言葉を習得する大切な時期であるとともに、言葉に親しむ資質や能力の基礎を養う時期でもある。漢字の習得や内容の読み取りの正確さを求める学習活動によって「分かった」「できた」という実感をもつことが大切であることは言うまでもないが、そればかりを追い求めることなく、学習のどの場面においても「楽しむ」「親しむ」という豊かな心をはぐくむ視点を忘れないようにすることが、関心・意欲を高めるために大切なことである。

— 小学校で、言葉に対する関心・意欲・能力に大きく影響すること —

- | | |
|---------------------|----------------------|
| ○ 教師が児童に「毎日話している言葉」 | ○ 自由な学習活動ができる「学級の経営」 |
| ○ 授業や学校行事での「発表経験回数」 | ○ 達成感を得ることができる「学習目標」 |
| ○ 楽しく学ぶための「学習教材の工夫」 | ○ 児童の発想を尊重する「教師の教育力」 |

(2) 小学校における伝統的な言語文化の指導方法の工夫

国語科は、言語を直接扱う教科であるため、すべての学習活動が言語活動の充実につながっている。国語科において学習意欲を高めるための授業モデルを考える場合は「楽しむ」「目標を絞り込む」「繰り返す」「実際の生活で使う」という4つの観点が大切である。今回のプロジェクトにおいては、伝統的な言語文化を学ぶことをテーマにして「言語そのもの」や、「文化的な言語生活」、更には「言語芸術や芸能」に触れ、実際の生活や学習活動の中で「楽しみながら」「より豊かな言語活動」ができるような授業モデルを構築した。

学習意欲を高めるための具体的な言語活動例を以下に示す。

第1学年及び第2学年

「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりする」

児童の発達の段階に合わせて易しく書き換えられたものを取り上げて楽しむ。

- ①本や文章の読み聞かせを聞く ②独特の語り方や口調や言い回しを聞いたり発表し合ったりしながら楽しむ ③初歩的な語りを経験する ④劇をして楽しむ ⑤紙芝居を楽しむ

第3学年及び第4学年

「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりする」

「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使う」

親しみやすい（内容や地域性を考慮した）素材を選んで音読や暗唱をして、文語の調子に親しむ。先人の知恵や教訓、機知に触れて使ってみて、実際の言語生活を豊かにする。

- ①音読や暗唱をする ②短歌や俳句を創作する ③身近にある歌について調べたり情景を想像したりする ④辞書を活用する ⑤古典に関係する児童書などを活用する ⑦本や文章からことわざ・慣用句・故事成語探しをする ⑧ことわざなどが含まれた短い文を作る

第5学年及び第6学年

「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読する」

「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知る」

独特のリズムや長い年月を経て培われてきた美しい語調を、音読したり暗唱や群読を取り入れたりして感覚的に味わう。昔の人のものの見方や感じ方に関心をもたせる。

- ①音読、暗唱をする ②昔の人と現代人のものの見方や感じ方を比べる ③能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎、落語などを鑑賞する ④古文や漢文などを話題にしている文章を読む

2 事例

万葉集（短歌）に親しもう ～発見！！万葉集でみる平城京～（第4学年）

(1) 単元の構想

ア はじめに

平成23年度から全面実施される新学習指導要領で、伝統的な言語文化に関する指導の重視が挙げられている。創造と継承を繰り返しながら形成されてきた伝統的な言語文化に親しませて、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるようにというねらいで、中学年では「易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語などを取り上げること」が示されている。奈良県には、記紀万葉や古今和歌集などの勅撰和歌集で触れられたり歌われたりしている素材が身近に豊富にある。その中でも、特に奈良になじみが深い『万葉集』の短歌を中心にした学習を設定することにした。

イ 学習活動の流れ

1 学年当初、児童たちに、「短歌について何か知っていますか。」と聞いたところ、「百人一首をしたことがある。」と答えた児童が半数近くいたので、短歌に親しむための単元学習の前段階として『小倉百人一首』を遊びの中に取り入れてみた。どの児童も予想以上に喜んで遊び、図書室で百人一首関連の本を手にしている姿も見られるようになった。また、「短歌って何ですか。」という質問には「短い歌。」と答えた児童が多かったので、少し理解を深めるために「国語辞典」を活用し、「短歌とは、五・七・五・七・七の三十一音でできた歌である。」ということを押さえた。

2 児童が情景をつかみやすく、歴史的仮名遣いが使われていない近代短歌を数首取り上げて学習した。歌の意味にはとらわれず、「いつの時代」に「どんな人」が「どんなとき」に作った歌なのかを感じるままに自由に発表する中で、児童は、季節、風情や歌に込められた思いなど想像しながら、短歌がもつおもしろさを感じる事ができたようである。

3 文語調の短歌を取り上げるにあたっては、児童になじみのある百人一首の中から「君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」と、奈良県の地名が登場する「嵐吹く三室の山のもみじ葉は竜田の川の錦なりけり」という2首を選んだ。これらも意味をとることは目的にせず、自由に情景を想像させるだけの学習活動にした。

児童は、「君」を母親と読みとったり恋人と読みとったりして、言葉や歌の響きから自由に感じるままに情景を想像したようであった。また、「竜田の川の錦」を、絹織物のような感じであるととらえ、色鮮やかな絵を描いて表現する児童もいた。(図1参照)

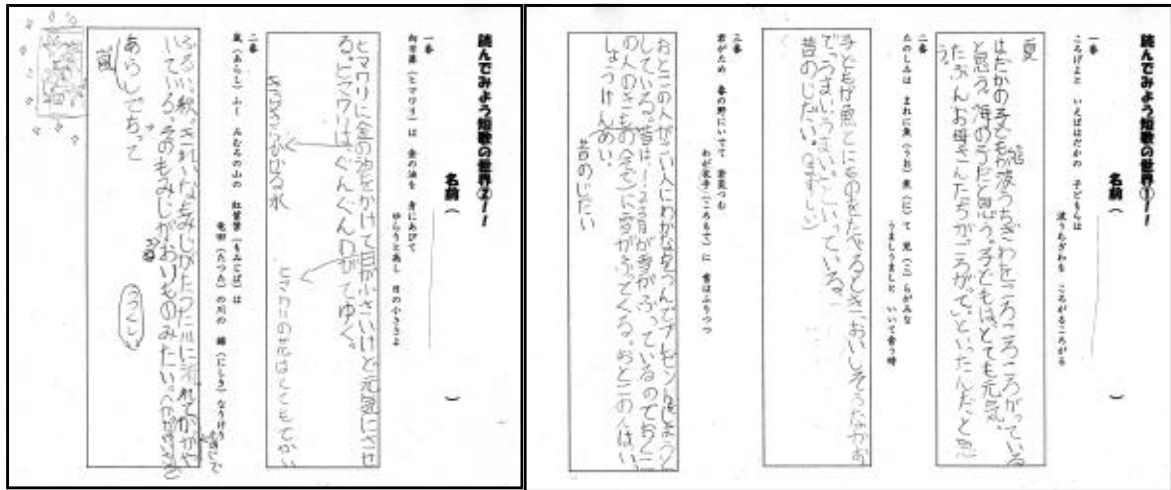


図1 近代短歌・百人一首のワークシート

4. 俳句の学習を行った。俳句は「五・七・五の十七音であること」「季語が必要であること」を踏まえ、秋をテーマにした俳句づくりも行った。この授業を通して、児童は、七音五音を中心としたリズムや文語調から国語の美しい響きを感じ取りながら音読する楽しさを感じることができていたように思う。

これらの学習活動を基盤として、より深く短歌に親しみ、より身近に感じるために、奈良県に縁のある『万葉集』を教材として取り上げて学習を進めた。『万葉集』は、現存する日本で最も古い歌集である。今回学習した短歌だけでなく、長歌、挽歌、相聞歌など4500余首が収められ、自然や恋愛や死をテーマにしたものなど、様々な歌がある。それらの歌には、当時の人々の喜び、悲しみや嘆きがそのまま表現されており、古代の人々の思いが率直に伝わってくるとも貴重な古典である。ふるさと奈良の魅力に触れ、奈良を素材にした伝統的な言語文化に親しむことで、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことを目指して、本単元の設定に至った。

ウ 学習指導要領との関連

国語科の指導は、これまで「話すこと・聞くこと」、「書くこと」「読むこと」の3領域及び[言語事項]で構成されていたが、今回の学習指導要領の改訂で、3領域と[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]に改められた。[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]は、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることや、国語が果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けることとともに、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることに重点をおいている。

エ 単元の特性

本単元「万葉集（短歌）に親しもう」は、『万葉集』の中から奈良県の地名や児童の住んでいる地域にあった平城京の景色を詠んだ短歌を教材にしたものである。短歌の五・七・五・七・七の三十一音から、季節や風情、歌に込められた思いなどを思い浮かべたり、七音五音を中心としたリズムや文語調から国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり暗唱したりして、古典に親しむ態度を育成することを目的としている。

(2) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

- 短歌のおもしろさに気付き、関心をもつ。 (国語への関心・意欲・態度)
- 短歌の情景を思い浮かべ、歌に込められた思いを感じることができる。 (読む能力)
- 自分で考えた短歌を発表することで、想像的な表現をすることの楽しさを味わうことができる。 (読む能力)
- 易しい文語調の短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読や暗唱したりすることができる。 (伝統的な言語文化についての知識・理解・技能)

イ 単元の評価規準

	単元の評価規準	学習における具体的な評価規準
ア 関心・意欲 ・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・万葉集に関心をもち、すすんで学習しようとしている。 ・短歌のおもしろさに気付き、関心をもち学習に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①万葉集に関心をもち辞書を活用したり、調べたりしている。 ②短歌に関心をもちすすんで学習に取り組もうとしている。
イ 読む能力	<ul style="list-style-type: none"> ・短歌の情景を思い浮かべ、歌に込められた思いを感じることができる。 ・自分で考えた短歌を発表することで想像的な表現をすることの楽しさを味わっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①短歌の情景や歌に込められた思いを考え、発表している。 ②短歌のリズムを考えながら、想像的な表現を取り入れ短歌をつくっている。
ウ 伝統的な言語文化についての知識 ・理解・技能	<ul style="list-style-type: none"> ・易しい文語調の短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読や暗唱をしようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読している。 ②短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら暗唱している。

(3) 指導と評価の計画

次	時	○ねらい●言語活動	評価規準と評価方法
一	1	○万葉集（短歌）に関心をもつことができる。	ア - ①
	2	<ul style="list-style-type: none"> ●「短歌」や「万葉集」という言葉で知っていることを発表したり辞書を活用して調べたりして発表する。 ○万葉集の中の短歌の情景を思い浮かべたり、短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり暗唱したりすることができる。 ●万葉集の中から、リズムカルで奈良県の地名が登場する短歌を音読する。 ●万葉集の中から、百人一首にも収められている短歌の情景を思い浮かべながら、音読したり暗唱したりする。 	イ - ① ウ - ① ウ - ② (発表の様子を観察 ・ワークシート)
二	3	○平城京の景色を歌った短歌の情景を思い浮かべ、歌に込められた思いを感じることができる。	イ - ① ウ - ①
	4	<ul style="list-style-type: none"> ●作者が思っていること、考えていること、季節やどんな様子を歌った歌なのか自由に発表する。 ○短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら、音読や暗 	ウ - ② (発表の様子を観察 ・ワークシート)

		<p>唱ができる。</p> <p>●平城京の景色を歌った短歌の情景を思い浮かべながら、さまざまな読み方で音読したり暗唱したりする。</p>	
三	5 6	<p>○創作短歌ゲームをしたり、自分で短歌をつくったりすることができる。</p> <p>●奈良にちなんだ七音、五音の言葉を考えワークシートに書く。</p> <p>●創作短歌ゲームをグループで順番に発表し、短歌を完成する。</p> <p>●つくった短歌を紹介し合う。</p>	<p>ア - ②</p> <p>ウ - ②</p> <p>(発表の様子を観察 ・考えた言葉の短冊 やワークシート)</p>

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導と評価の工夫

ア 指導の工夫

指導にあたっては、万葉集の中からリズムカルなもの、奈良県の地名が登場するもの、百人一首にも収められている有名なものを取り上げて、関心をもたせる工夫をした。文語調の短歌は、児童にとって日常生活の中でなじみの深いものではないので、繰り返し音読させることを重視し、文語調のリズムのよさを味わいながら国語の美しい響きを感じ取り、楽しみながら学習を進めた。また、平城京の景色を詠んだ短歌を取り上げるにあたっては、効果的に暗唱したり、短歌が詠まれた時代の情景を想像したりできるように、視聴覚教材『古典に親しもう』(DVD)を活用した。自分たちなりの情景を思い浮かべ、その短歌に込められた思いを自由に想像させることを大切にして、短歌の意味に束縛されることなく、児童が感じ取った感想や感動を大切にしていくことが重要であると考えた。

さらに、古典に親しむ態度を育てながら、児童が自分でも短歌をつくって発表してみたいという意欲がわくように、創作短歌ゲームを取り入れた。グループで、それぞれ七音、五音の言葉を考え、無作為に組み合わせて五・七・五・七・七となる一つの短歌をつくり上げるゲームである。三十一音の構成になれば、自分で短歌をつくり、音読することを通して短歌のリズムや和歌の心地よさを感じられるように展開した。

イ 音読の方法

本単元では、音読の学習を重視した。様々な音読の方法を取り入れ、児童が自然に短歌に慣れ親しんでいくように工夫した。

短歌を提示する時は、すぐに七音五音で切るのではなく、遊び感覚で児童の好きなところで区切らせ、様々な読み方を体感させた後で、七音五音の音で区切って読むという学習方法をとった。そうすることで、児童が七音五音のリズムの心地よさを自然に感じ取れるようになったように思う。

音読の種類

- 1 **七音五音読み** 音ごとに区切って歌うことで、リズムよく歌うようにする。
- 2 **山びこ読み** 教師(あるいは児童も)が歌ったあとに同じ箇所を続けて歌う。声をそろえて歌う楽しさを味わわせる。
- 3 **つづけ読み** 教師が歌ったら次の箇所を児童が続けて歌う。歌い終わるとすかさず続けて教師が歌う。リズムよく歌うことに楽しさを感じることが

できる。(児童二人で、交互に行うこともできる)

4 一斉読み

みんなで声をそろえて歌う。音読の苦手な子もみんなでそろえて歌うことで一定の速さで歌うことができる。

5 リレー読み

児童が交互に歌う。ゲーム感覚で音読を楽しめる。音ごとに歌い手がかわる。一人で歌っているかのように間を空けず、スムーズに歌うようにすると緊張感を保って歌えるので楽しめる。

6 暗唱読み

板書した短歌の文字を、教師が少しずつ消していくのを見ながら、児童が歌っていく。

例 ①板書「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」

②文字を消す「あ 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」

③さらに消す「あ 奈 咲 にほふがごとく 今盛りなり」

※視聴覚教材『古典に親しもう』(DVD)が活用できる

7 古代読み

音ごとに区切って歌うのではなく、自分が想像する古代人の気分になりきって、抑揚やリズムを自由につけながら歌う。

8 歌垣読み

手拍子をつけながらリズムを体全体で表現し抑揚をつけて自由に歌う。

9 貴族読み

現在に伝わる歌会やかたるた大会での読み方を意識して自由に歌う。



(5) 指導の実際

ア 本時の目標 (第3時)

- ・短歌のおもしろさに気付き、関心をもつ。(国語への関心・意欲・態度)
- ・平城京を詠んだ短歌の情景を思い浮かべ、歌に込められた思いを感じることができる。(読む能力)
- ・短歌のリズムや国語の美しい響きを感じ取りながら、音読や暗唱ができる。(伝統的な言語文化についての知識・理解・技能)

イ 展開

学習活動	指導内容 (○) と留意点 (◇)
1 前時の学習を確認する。	○万葉集と短歌の特徴について確認させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・奈良時代に作られた日本で一番古い歌集。 ・五・七・五・七・七の三十一音の歌。 ○万葉集の中の短歌「春過ぎて夏来るらし白たへの衣ほしたり天の香具山」の情景を思い浮かべながら暗唱をさせる。
2 本時のめあてを確認する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 万葉集の中の短歌を音読したり暗唱したりしよう。 </div>

<p>3 言葉のリズムを楽しみながら、音読する。 「あをによし奈良の都は咲く花の にほふがごとく今盛りなり」 ・様々な読み方で音読する。</p> <p>4 作者が思っていること、考えていること、季節やどんな様子を歌った歌なのかをワークシートに記入し、自由に発表する。</p> <p>5 短歌を暗唱する。</p> <p>6 本時の振り返りをする。</p>	<p>○七音五音を中心としたリズムから、国語の美しい響きを感じ取りながら音読させる。</p> <p>○歴史的仮名遣いには、ルビをつける。</p> <p>○ワークシートに書き写しをさせる。</p> <p>○歌われている情景や歌に込められた思いなどを考えさせる。</p> <p>○辞書を活用させる。</p> <p>◇視聴覚教材（絵写真）を活用する。</p> <p>○情景を思い浮かべながら暗唱させる。</p> <p>◇視聴覚教材『古典に親しもう』（DVD）を活用する。</p> <p>○次時の学習の意欲につながるように、児童の良かった点を評価する。</p>
--	--

ウ 考察


(7) 文語調の短歌を指導する際の工夫

短歌を提示するときには、次の5点に特に留意しながら毎時間学習を進めた。その結果、児童が文語調の短歌に抵抗なく取り組むことができ、関心・意欲を高めることができた。

1. 七音五音を中心としたリズムから国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり、暗唱したりして、楽しむ。
2. 歴史的仮名遣いには、ルビをつける。
3. 情景や歌に込められた思いなどを自由に考えさせる。
4. 辞書を活用する。
5. 視聴覚教材を活用する。

(4) 万葉集（短歌）に関心をもたせるための工夫

短歌って、五・七・五・七・七で、できているんだな。



万葉集って聞いたことあるよ。昔の時代の歌だ。

総合的な学習の時間で勉強している「平城京」の時代にも短歌ってあったのかな。

1. 万葉集は、みんなが総合的な学習の時間で調べた奈良時代にできた日本最古の歌集であることに触れて関心をもたせる。
2. 短歌は、五・七・五・七・七の三十一音でできていることを知り、その数になった理由を自由に想像させて興味をもたせる。

(7) 歌うことを楽しませるための工夫

児童が主体的に学習をすすめていくために、学習のめあてとともに歌うポイントを提示した。自由に発表ができるようなワークシートも作成して、和歌という形式に親しみながら、「歌」であることに気付き、関心をもたせる。

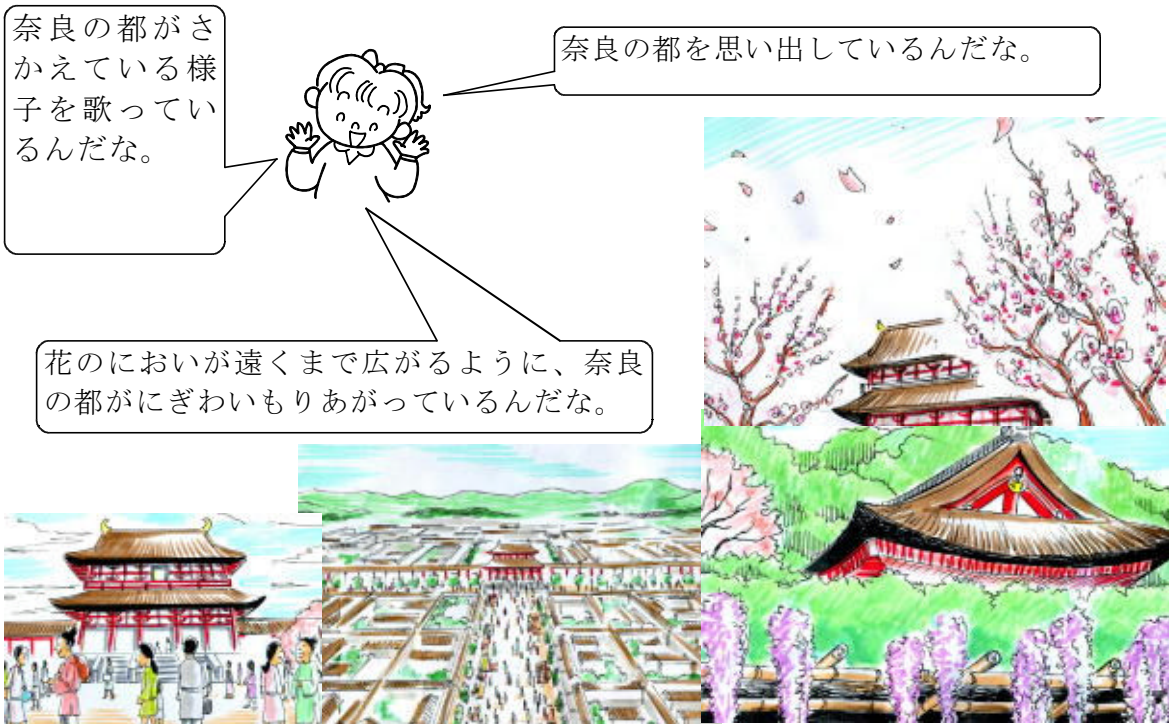


図3 「古典に親しもう」DVD資料



図4 「万葉集にふれよう」ワークシート



授業風景

(カ) 創作短歌ゲームをしたり自分で作った短歌を発表したりして、創作意欲を高める工夫。

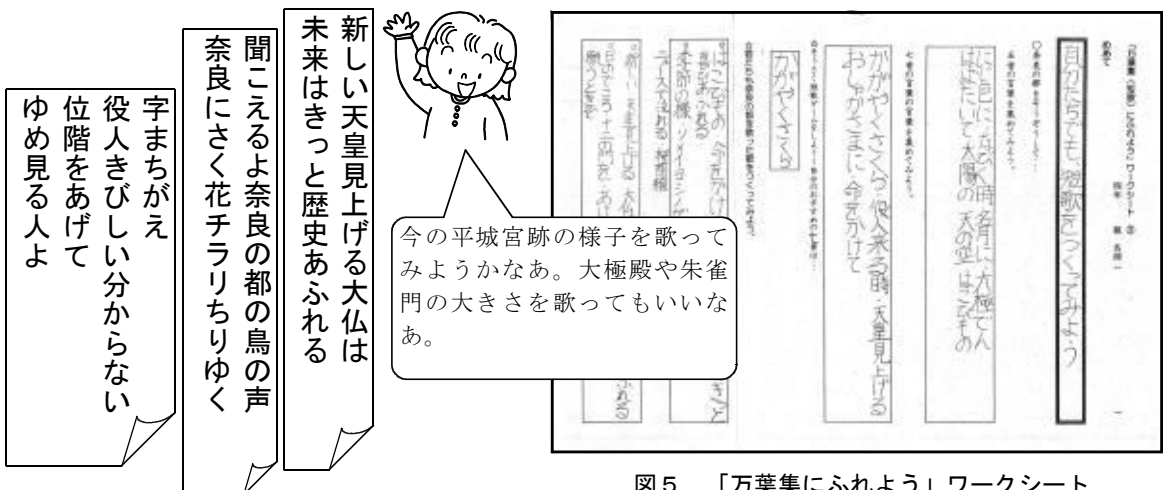


図5 「万葉集にふれよう」ワークシート

(6) 成果と課題

ア 授業を参観して下さった先生方の感想

- 4年生での短歌の学習は、文字を見て読むよりも、声に出して、聞いて楽しみ、想像することが発達段階に適していたように感じる。児童の中から「奈良時代に生まれて、そこにいてるような気がする！」という声が聞かれたのも、何度も繰り返し音読した成果であると言える。
- 奈良県で万葉集を扱うことの意義は大きい。特に本校はすぐ近くに平城宮跡があり、4年生は総合的な学習の時間、5年生は世界遺産学習と関連付けて学習することができる。
- 万葉集に触れることにより、自分たちの住む奈良の歴史的な意味も感じ、また伝えていくことの意義も十分感じていたように思う。

イ 音読による言語活動の充実

- 音読は、様々な方法を示しながら自由度を高め、児童が飽きることがないように工夫した。また、最初から七音・五音で区切らせるのではなく、児童が音読していく中でリズムを感じ自然に区切る場所を体感していた。その結果、単元学習の最後には短歌を歌うように音読し、学級の中から手拍子や声かけも自然に生まれ、体全体で短歌を楽しんでいたように思う。授業後の振り返りのワークシートに二重丸で答えるところを何重にも丸を書き、花丸になっていたことから、児童が楽しく学習できたことがわかる。

ウ 視聴覚教材の活用やゲストティーチャー参加による学習意欲の喚起

- 今回は、児童が情景を感じやすくするために視聴覚教材も活用した。『古典に親しもう』(DVD)を活用し奈良時代の節をつけて歌った短歌を聞かせたり、ゲストティーチャーを招くことで、児童が万葉集をより身近に体感することができた。

エ 短歌に関心をもち、創作する意欲がわく学習活動の工夫

- 短歌を創作する学習活動の前に俳句の学習を取り入れた。また、創作短歌ゲームを行い、全員が七音・五音の言葉をたくさん集めた。グループで短歌の形にすることで、短歌を作ることへの抵抗を取り払うことができた。そのため、自分一人で短歌をつくる活動では、児童が思い思いにスムーズに作ることができたように思う。

オ 万葉集を扱う場合の課題

- 歴史を学習していない児童に、万葉集の時代背景を理解させることは困難である。しかし、児童の発想を大切に、様々な情景を自由に発表させることで、作者たちの人間としての思い、季節や風情などを感じ、思い浮かべさせることができた。4年生では万葉集の歌の内容(現代語訳)にとらわれたり、背景について詳細に理解させなくても、十分に学習の目的を達することができると思う。そのことは次の「カ」でも触れる。

カ 学習意欲を高めるための授業モデルの考え方

- 国語科における学習意欲を高めるための授業モデルとして、今回の具体的な学習活動の内容と、単元学習後のアンケート結果は以下のとおりである。学習活動の内容が、学習意欲を高める授業モデルの言語活動として有効だったと考えることができる。

学習活動内容

1. 楽しく音読
2. たくさん音読
3. みんなで音読
4. 考えて音読
5. 工夫して音読
6. 自由に想像する
7. 自分で調べる
8. 言葉で遊ぶ
9. 楽しんで作る
10. 発表し合う
11. 暗唱する
12. 自由に詠む
13. 自由に歌う
14. 楽しんで歌う
15. 自らの思いを語る

Q 1 短歌の学習をする前と比べて、国語の学習はもっと好きになりましたか。(授業後)

好きになった	27
どちらかといえば、好きになった	2
どちらともいえない	0
どちらかといえば、きらいになった	0
きらいになった	0

「好きになった」「どちらかといえば、好きになった」が合わせて100%になっていることから、今回の単元学習が「国語の学習」に対する児童の興味・関心を高めていることがわかる。

Q 2 「短歌」の学習は楽しかったですか。(授業後)

楽しかった	29
どちらかといえば楽しかった	0
どちらかといえば楽しくなかった	0
楽しくなかった	0

楽しかった理由については「いろいろな歌い方ができた」「奈良時代の人の気持ちを考えるのがおもしろかった」などが挙げられていた。

Q 3 「万葉集」の学習は楽しかったですか。(授業後)

楽しかった	29
どちらかといえば楽しかった	0
どちらかといえば楽しくなかった	0
楽しくなかった	0

「楽しかった」が100%である。児童の感想から、短歌の意味解釈の正誤にこだわらずに自由に想像したことが楽しさにつながったことが読みとれる。

Q 4 国語の授業で自分の考えを話したり書いたりしたいですか。(授業後)

	授業前	授業後
したい	10	17
どちらかと言えばしたい	14	10
どちらかと言えばしたくない	5	2
したくない	0	0

この単元学習は「話したり書いたりすることを通して読む能力を高める」ことを目標にしているが、想像的な表現をすることで「話すこと」「書くこと」についても意欲が高まったようである。

参考文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』(2008.8) 東洋館出版社
- (2) 『新しい国語の授業 - 言語活動の充実で活用する力を育む』(2009.6) 東洋館出版社